

ジャンパー

2008(平成20)年2月21日鑑賞(東宝試写室)

★★★



監督=ダグ・リーマン／原作=スティーヴン・グールド『ジャンパー 跳ぶ少年』(早川文庫刊)／出演=ヘイデン・クリステンセン／サミュエル・L・ジャクソン／レイチェル・ビルソン／ジェイミー・ベル／ダイアン・レイン (20世紀フォックス映画配給／2008年アメリカ映画／88分)

……遺伝子異常によって生まれたという、瞬間移動の特殊能力を備えた人間がジャンパー。他方、その抹殺を目指す秘密組織がパラディン。そんな奇想天外なアイデアから生まれた、世界を股にかけた死闘の行方は……？ 「映画はアイデアと脚本が勝負！」の実践だが、さてあなたのお好みは……？

映画はアイデアと脚本が勝負！ 遺伝子異常により生まれた瞬間移動の能力を備えた人間=「ジャンパー」というアイデアは出色！ ジャンパーは世界中どこへでも一瞬のうちに移動できるから、究極の自由を手に入れるとともに、銀行強盗だって易々と……。

この映画の主人公は15歳のときにジャンパーの能力に気づき、23歳の今、その能力を駆使して毎日を生きているデヴィッド(ヘイデン・クリステンセン)。世界の頂点に立っている気分だが、同時にその秘密を恋人のミリー(レイチェル・ビルソン)にも打ち明けることができないため、彼は孤独だった。

他方、「そんな能力は神だけにしか許されない」と考え、ジャンパーたちの抹殺を使命とする秘密組織がパラディン。その精銳エージェントがローランド(サミュエル・L・ジャクソン)だ。はじめてのパラディンからの襲撃から逃れたデヴィッドは、故郷でミリーと再会し、今は彼女の憧れの地ローマで甘いデートを楽しんでいたが、そこで出会ったのが同じジャンパーであるグリフィン(ジェイミー・ベル)。次々と迫ってくる危機を前に、デヴィッドは、パラディンとの死闘をくり返してきたグリフィンと一緒にローランドたちに立ち向かっていくことに。

ニューヨーク、ロンドン、パリ、ローマという大都会でのリッチな生活から、スフ

インクスの上でのランチ、キリマンジャロの上での昼寝、フィジー諸島での大波を追ってのサーフィンまで、ジャンパーたちの自由な行動はまさに規格外！さらに闘いの展開においても、戦車が行き交うチェーンでの起爆装置をめぐるデヴィッドとグリフィンとの闘いなど、世界を股にかけたジャンパーたちの行動は実に奇想天外（荒唐無稽……？）。

この手の映画は好き嫌いがハッキリ分かれるだろうが、さてあなたのお好みは……？

2008(平成20)年2月22日記

ミニコラム

野茂への拍手と、さらなる期待

リチャード・ギア扮する『ハンティング・パーティ』の主人公である戦場ジャーナリストのサイモン・ハントはメチャ個性の強い男。そうだからこそ、あんな無茶苦茶な取材旅行ができたわけだが、08年7月17日引退を発表した野茂英雄投手は、彼に負けず劣らず個性の強い男。

和をもって貴しとなす。AD604年に聖德太子が制定した17条の憲法が今なお日本人の心の拠り所だが、国際化が進みグローバルな競争社会に突入した今日、そんな価値観だけでは世界に伍していくのは無理。それを実践で日本人に示したのが、サイモン・ハントと同じフロンティア・スピリットの持ち主NOMO=野茂だ。彼のトルネード投法は村田兆治投手のマサカリ投法と同じで、常識にとらわれない独自の工

夫。結果がすべての勝負の世界は、そんなオレ流でオーケーのはず。ところが、日本の狭い野球界と野球観は彼の大リーグ挑戦に異論を唱え、協力を拒否したはずだ。今でこそ、後に続いたイチロー、松井秀喜、松坂大輔らが大活躍だが、日米通算201勝を挙げた野茂の突破力はすばらしい。そんな彼は、03年のNOMOベースボールクラブの設立など、04年の石毛宏典氏による四国アイランドリーグ設立と同じように、やることがユニーク。そして地に足をつけたもの。マスコミ受けを狙った派手な行動ではなく、自己の信念に従つて行動した眞のサムライ野茂投手。私はそんな彼に拍手するとともに、引退後の野球界におけるさらなるフロンティア・スピリットの展開に期待したい。

2008(平成20)年8月5日